

小説に使用される性差マーカー

Ruth Vanbaelen

キーワード：書きことば、性差マーカー、女性性・男性性、役割語

1. はじめに

小説の読み手はどのように登場人物を見分けるのだろうか、小説の作者は混乱を避けるためにどのような工夫をしているのだろうか。実際の会話と比較して小説において最も欠けているといえる情報は音声であろう。その他に欠けている要因はいくつか考えられ、著者はそれを実際の会話とは異なる方法で読者に伝え、補わざるを得ない。欠けている要因として小説中の会話者の名前、年齢、役割、地位など様々挙げられる。これらの要因は話が展開するにつれて明らかになる。しかし、これらのことを把握していても小説中の会話においてどの人物がターンを取っているか必ずしも常に文脈からはっきりしているわけではない。にもかかわらず、脚本などのように発話者のターンごとに名前を書くという方法は小説にはあまり使用されていない。読み手を混乱させないように著者は普段発話者のことばづかいに何らかの区別を付けることによって発話者が男性か女性かなどを示す方法を取っている。

話しことばにおける男女差は広く認められ、研究されている。しかし、書きことば¹において話しことばと同じような語句、すなわち、終助詞、美化語や人称代名詞などが発話者の性を示すためにどのように使用されているかということになると先行研究が少ない。したがって、小説中の会話に表われる性差を調べる端緒として、まず、小説の読み手が小説中の発話のどの語句を性差を判定する根拠としているかの調査をすることにした。

2. フレームワーク

金水(2000)は小説におけることばづかいの研究において登場人物の台詞を「役割語」の視点から考察している。そこでは役割語を次のように定義している：

「ある特定のことばづかい（語彙・語法・言い回しなど、あるいはスピーチ・スタイル）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿、風貌など）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうなことばづかいを思い浮かべることができるとき、そのことばづかいを「役割語」と呼ぶ。」(2000:311)

¹ 「書きことば」という用語は多少曖昧であるが、ここでは自然な話しことばと違って、最初から小説の読み手のために文字で表されることを前提としている言語表現として、「書きことば」と呼んでおく。

金水が挙げる例には「博士語」や「お嬢様語」などが含まれている。このような役割はステレオタイプに近いものであるため、そのような人物を想像する際かなり特色のあることばづかいが考えられるが、本論文で扱う小説の中にこのようなはっきりしたステレオタイプは登場しない。それにもかかわらず、日本語話者である読み手は以前の会話経験に基づき言語以外の情報（性・年齢・社会階級・職業など）に基づいて人物像を作り上げ、それに伴うことばづかいを期待する。または逆に、あることばづかいを聞いたか読んだかという場合、どのような人物が話しているか想像できる。他の読み手とはほぼ同じものを期待するため共有知識²とも呼べる。書き手自身も日本語話者としての自分の経験を生かし、それに従って必要な限りに登場人物の台詞を作り上げている。特に日本語は男女差の激しい言語であるため、性さえはっきりしていれば読み手にとってだいたい発話者が誰だか見当がつくことが多い。そのため本論文ではどのような語句が発話者を明らかにするか「性」を中心に調べることにした。

被験者に小説中の会話から抜き出した 30 の発話の発話者の性を判定してもらい、その判定の根拠となった語句に下線を引いてもらった。これらの語句は性を明らかにするマーカー（有標の語句）の働きをすると考え、それを「性差マーカー」と呼ぶことにする。つまり、文章や文脈に十分な手がかりがない場合、書き手が「性差マーカー」を通して読み手に発話者の性を伝えると考える。調査では話しことばにおいて男性または女性のことばづかいの領域だと思われるものを調査項目として扱った。選択した発話のうち発話者の性が判定しやすいものとそうでないものがあると予想される。性の判定がしやすい発話はマーカーの男性性（Masculinity）・女性性（Femininity）の度合いが高いとする。これらは一般的に話しことばにおいても男女差が強く意識されるものであろう。ただし、これらの項目が書きことばにおいて発話者の性を判定するために話しことばとまったく同じ役割を果たすとは断言できない。または書きことばにおいて「性差マーカー」の役割を果たすものは必ずしも話しことばにおいてそのような役割を果たしているわけではない。要するに、話しことばにおいて男性語・女性語と認められている要因が書きことばにおいてはそのまま認められないケースが考えられる。このように判断が揺れるものは男性性・女性性の度合いがより低いといえる。なお、「性差マーカー」は一方の性によってのみ使われ他方の性には全く使われえないといった絶対的なものではなく、多くはどちらかの性に偏ってよく使われるといった、程度の度合いを表すものであると考えられる。この現象（判定しやすい・しにくいこと）は①文脈に十分な情報が含まれるか否か、そして②発話者の役割、によって決定されると考える。例えば、程度の度合いが低いものの場合、文脈が欠けている要素を捕うのであろう。そして、特殊な役割をもつ人物（例えば、お嬢様など）の発話の場合、文脈から既に十分な情報を得られていても、なおその発話は多くの「性差マーカー」、また

² 金水(2000)によると日本語の母語話者は実在するキャラクター（例：学生、やくざ）のことばづかいのみならず「架空」の言語（例：博士語）に関してさえ「共有知識」を持ち、与えられた文章と役割を結びつけるというテストをほぼ 100%で正しく答えることができるという。

は男性性・女性性のより高いものを含むと予想される。さらに、ある性の発話が他の性よりその発話者の性を判断しやすいたしたら、それはその性がより明白にマーカーを使用し、読み手はより簡単にそのマーカーが把握できることを示すことになる。小説においてある性の発話が他の性より判断しやすいかどうか調べるために、調査の例文を選択した際、本論文でいう「性差マーカー」以外の情報、すなわち、性の他の標識となる名前や人称代名詞などをできる限り含まないものに絞った。なお、読み手にとって文脈は発話者の性を判定するためにあらゆる情報を含むしている。被験者が判定の際このような情報に左右されないように第1部の調査では文脈をはずすことにした。

3. 調査項目と調査の“ねらい”

質問紙調査法³⁾により調査を行い、資料として江國香織著『流しのしたの骨』を使用した。調査は2001年6月に筑波大学の大学生・大学院生を対象に行った。大学生・大学院生を選んだ理由は資料として使用する小説の登場人物との年齢や生活範囲が近いからである。84人の被験者の年齢は18歳から24歳の間で、女性は57人、男性は27人である。

調査質問紙（付録を参照）を作るに当たり、調査項目を絞らざるを得なかった。それは調査を記入する時間が長くなるにつれて被験者の正確さが落ちるからである。音声言語では使われなくなりつつある終助詞「わ」や「かしら」は、女性語特有のマーカーとしての認識が強いのは自明であろうと思われるためあえて調査に含まないことにした。同様に、男性人称代名詞の「はく」や「おれ」も調査を省略した。

性差判断のマーカーとなるかどうか注目した項目は終助詞「よ」「の」「ね」「ぞ」及び「かな」、命令表現⁴⁾「なさい」「ちょうだい」「ください」「んじやない」及び「動詞の連用形＋て」、さらに動詞の丁寧体及び断言を表す「んだ」である。できる限りマーカーを複数含まないように発話を選択したにもかかわらずいくつかの発話はやはり2つ以上のマーカーを含む。以下の通りのねらいをもって発話を選択した：

1) 終助詞：

a. 「よ」：A1⁵⁾、A25、A29：「よ」は終助詞として使用の幅が広く、男女ともによく使われる。機能として相手の意志をたずねる余地がなく相手にかまわず話し手の意志を押し出すことや押し通すという意図をもつ（メイナード 1993）。このようなかなり中立化した終助詞が小説における「性差マーカー」として成立するか調べる。

b. 「の」：A2、A14、A19：「の」は発話者の意見を強調する機能と疑問を表す機能を2つも

³⁾ 質問紙調査は第1部及び第2部からできている。第1部では資料とする小説から、男性または女性のことばづかいに特有と思われる語句を含む文を選択し、文脈を与えずに被験者に①発話者の性を判定してもらい、②性差判定の根拠となった部分に下線を引いてもらった。第2部では文脈もはっきりさせた8つの短い会話を取り上げ、被験者にその会話の自然性を判定してもらい、そしてさらに被験者自身が同じような場面でどのように話すか書いてもらった。本論文では第1部の結果についてのみ分析を加える。

⁴⁾ 本研究では命令表現を幅広く捉えることにする。つまり、「んじやない」のような禁止表現を否定の命令として、さらに「てくれるかな」のような依頼表現も一種の命令として扱う。

⁵⁾ 項目としてとりあげた語句を含む発話を示す。A1は質問紙の質問Aの1番目の発話を示す。以下同様。

つ終助詞である。『日本語教育事典』(1982)によると「の」は文の調子をやわらかくし、軽く断定する。主に女性が使用するとされる。小泉(1976)の分類に基づけば女性にやや多く使用される。だが、小川(1997)の研究では、若い男性が、疑問を表す「の」を女性より多く使用することが判明した。したがって、「の」は女性特有の終助詞であると一概にいえなくなってきた現在、被験者が「の」をマーカーとして選ぶか調べる。

c. 「ね」：A3、A12、A18、A22、A27、A29：「ね」は相手の意志や気持ちをたずねる表現であるとメイナードは記述している(1993)。小川(1997：209)が挙げる使用頻度をみると女性の方により多く使用される。

d. 「ぞ」：A7：「ぞ」は主に男性に使用される終助詞であるため、上記の「わ」や「かしら」と同様に強いて調査する必要はない。しかし、A7は「んじゃない」という否定の命令を含有し、被験者にとってどの部分がマーカーとなるかに注目する。

e. 「かな」：A17、A28：「かな」は以前女性より男性に多く使用されてきたが、女性の間にも広く使われるようになってきた。

2) **動詞**：遠藤(1991)を引用している Takano (2000)は次のように指摘する：

Politeness and indirectness as linguistic manifestations of women's social personality have thus become the culturally recognized norms for the speech of Japanese women in general (p48).

他の研究(井出 1983、Smith 1992b など)にも取り上げられている丁寧な話し方、そして断言を避けることが女性特有のことばづかいであることに基づき動詞の丁寧体及び断言を表す表現を項目として扱うことにした。

a. 丁寧な表現：A4、A8、A16、A24

b. 断言を表す表現「んだ」：A5、A9、A26

c. 命令表現：Smith(1992b)は命令表現および依頼表現を丁寧度の低い順からリストアップしている。『日本語教育事典』において禁止の表現として扱われている「んじゃない」はそのリストに表示されないが、「んだ」の否定表現だと考え、「んだ」の位置におくことにした⁶。以下のように質問紙調査で扱った命令表現を丁寧度の低い順からリストアップすることができる。女性のことばづかいがより丁寧であることから被験者が実際に丁寧度の高いものを女性性の高いものとして読みとるかどうかが調べる。

「んじゃない」：A7

「なさい」：A2、A6、A23、A29

「動詞の連用形+て」：A8、A12、A13、A15、A16

「ちょうだい」：A21、A27

「てくれるかな」：A28

「ください」：A24

⁶ 野田(1997:115)も同様に「んじゃない」による否定命令が「のだ」による命令と共通している性質を持っていると記述しているため本論文の立場を支持するものとなる。

3) **接頭辞「お」**: A4、A16、A17、A30:『日本語教育事典』によると主に美化語の用法に男女差がみられる(1982:417)。同様に Vanbaelen (1997)における質問紙調査の被験者は接頭辞の「お」を女性特有のことばづかい、そして「お」の省略を男性特有のことばづかいとして挙げている。しかし、接頭辞との組み合わせが定着している名詞の場合、発話が他のマーカーを含有しない限り、被験者にとって性判断が困難となると推測できる。

4) **倒置**: A10、A11、A18:紙面上の関係で本論文ではあまり触れない。

5) **マーカーなし**: A20

4. 分析

4.1 男性の発話か?それとも女性の発話か?

表 17: 発話者の性: a=無回答 b=男性 c=女性 d=男女不明

番号	発話者	女性被験者				男性被験者				男女の合計			
		a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d
A1	女性	0(0)	0(0)	53(92.8)	4(7)	0(0)	1(3.7)	24(96.3)	0(0)	0(0)	1(1.19)	74(94)	4(4.76)
A2	女性	1(1.75)	0(0)	48(84.2)	8(14)	0(0)	1(3.7)	23(85.2)	3(11.1)	1(1.19)	1(1.19)	71(84.5)	13(15)
A5	女性	0(0)	2(3.5)	15(26.3)	40(70.2)	0(0)	3(11.1)	5(18.5)	19(70.4)	0(0)	5(5.95)	20(23.8)	59(70.2)
A6	女性	0(0)	2(3.5)	9(15.8)	44(80.7)	0(0)	2(7.4)	4(14.8)	21(77.8)	0(0)	4(4.76)	14(15.4)	67(79.7)
A8	女性	0(0)	0(0)	49(85.9)	8(14)	0(0)	0(0)	16(59.3)	11(40.5)	0(0)	0(0)	65(77.3)	19(22.6)
A12	女性	0(0)	0(0)	57(100)	0(0)	0(0)	0(0)	24(96.3)	1(3.7)	0(0)	0(0)	83(98.8)	1(1.19)
A13	女性	0(0)	0(0)	7(12.3)	50(87.7)	0(0)	0(0)	2(7.4)	25(92.6)	0(0)	0(0)	9(10.71)	74(89.2)
A14	女性	1(1.75)	1(1.75)	31(89.5)	4(7)	1	0(0)	19(70.4)	7(25.9)	2(2.38)	1(1.19)	70(83.3)	11(13)
A15	女性	0(0)	0(0)	15(26.3)	42(73.7)	0(0)	0(0)	5(18.5)	22(81.5)	0(0)	0(0)	20(23.8)	64(76.1)
A16	女性	0(0)	0(0)	57(100)	0(0)	0(0)	0(0)	27(100)	0(0)	0(0)	0(0)	84(100)	0(0)
A17	女性	0(0)	4(7)	4(7)	49(85.9)	0(0)	2(7.4)	2(7.4)	23(85.2)	0(0)	6(7.14)	6(7.14)	72(85.7)
A18	女性	0(0)	5(8.8)	3(5.3)	49(85.9)	0(0)	3(11.1)	2(7.4)	22(81.5)	0(0)	8(9.52)	5(5.95)	71(84.5)
A19	女性	0(0)	1(1.75)	33(57.9)	23(40.4)	1(3.7)	0(0)	14(51.9)	12(44.4)	1(1.19)	1(1.19)	45(53.9)	35(41.8)
A20	女性	0(0)	1(1.75)	4(7)	52(91.2)	0(0)	0(0)	1(3.7)	26(96.3)	0(0)	1(1.19)	5(5.95)	70(82.8)
A21	女性	0(0)	0(0)	55(96.5)	2(3.5)	0(0)	0(0)	24(88.9)	3(11.1)	0(0)	0(0)	74(94)	5(5.95)
A22	女性	0(0)	0(0)	55(96.5)	2(3.5)	0(0)	0(0)	27(100)	0(0)	0(0)	0(0)	83(97.6)	2(2.38)
A27	女性	0(0)	0(0)	54(94.7)	3(5.3)	0(0)	0(0)	25(92.6)	2(7.4)	0(0)	0(0)	79(94)	5(5.95)
A30	女性	0(0)	0(0)	23(40.4)	34(59.6)	0(0)	1(3.7)	5(18.5)	21(77.8)	0(0)	1(1.19)	24(28.3)	55(65.4)
A3	男性	0(0)	7(12.3)	0(0)	50(87.7)	0(0)	5(18.5)	0(0)	22(81.5)	0(0)	12(14.2)	0(0)	72(85.7)
A4	男性	0(0)	0(0)	2(3.5)	55(96.5)	0(0)	2(7.4)	2(7.4)	23(85.2)	0(0)	2(2.38)	4(4.6)	70(82.8)
A7	男性	0(0)	55(96.5)	1(1.75)	1(1.75)	0(0)	26(96.3)	0(0)	1(3.7)	0(0)	8(9.52)	1(1.19)	2(2.38)
A9	男性	1(1.75)	13(22.8)	2(3.5)	41(71.9)	0(0)	12(44.4)	0(0)	15(55.6)	1(1.19)	25(29.7)	2(2.38)	56(66.6)
A10	男性	0(0)	4(7)	2(3.5)	51(89.5)	0(0)	3(11.1)	0(0)	24(88.9)	0(0)	7(8.33)	2(2.38)	75(89.2)
A11	男性	0(0)	21(36.8)	0(0)	36(63.1)	0(0)	14(51.9)	0(0)	13(48.1)	0(0)	35(41.6)	0(0)	49(58.3)
A23	男性	0(0)	1(1.75)	9(15.8)	47(82.4)	0(0)	3(11.1)	6(22.2)	19(66.7)	0(0)	4(4.6)	15(17.8)	65(77.3)
A24	男性	0(0)	2(3.5)	1(1.75)	54(94.7)	0(0)	4(14.8)	0(0)	23(85.2)	0(0)	6(7.1)	1(1.19)	77(91.6)
A25	男性	0(0)	14(24.6)	0(0)	43(75.4)	0(0)	13(48.1)	1(3.7)	13(48.1)	0(0)	27(32.1)	1(1.19)	56(66.6)
A26	男性	0(0)	56(98.2)	1(1.75)	0(0)	0(0)	27(100)	0(0)	0(0)	0(0)	83(98.8)	1(1.19)	0(0)
A28	男性	0(0)	26(45.6)	1(1.75)	30(52.6)	0(0)	18(66.7)	0(0)	9(33.3)	0(0)	44(52.3)	1(1.19)	39(46.4)
A29	男性	0(0)	40(70.2)	2(3.5)	15(26.3)	0(0)	19(70.4)	2(7.4)	6(22.2)	0(0)	59(70.2)	4(4.6)	21(25)

表 1 は 30 発話の発話者の性に関する被験者の回答の男女別および男女合計の数値を示す。この表から分かるように男性の発話より女性の発話の方が正しくその発話者の性を特定しやすいのである。18 の女性発話のうち 1 つ (A16) は被験者全員に正しく判断され、5 つ (A1、A12、A21、A22、A27) は被験者の 90%以上 に正しく判断され、2 つ (A2、A14) は 80%以上、1 つ (A8) は 70%以上、そして 1 つ (A19) は 50%以上 に正しく判断された。

7 括弧内は各発話に対する被験者のグループ別および全員の回答の内訳パーセンテージを示す。なお、便

その反面、12の男性発話のうち被験者全員に正しく判断されたものはない。被験者の90%以上に正しく判断されたものは2つ(A7、A26)のみで、その他それぞれ1つの発話が70%(A29)と50%(A28)の被験者に正しく判断された。

次に男女不明の回答をみる。女性発話の場合、4つ(A13、A17、A18、A20)は80%以上の被験者に男女不明と判断された。その他に3つ(A5、A6、A15)の発話は70%以上にとって判断が困難で男女不明と判断された。さらに発話A30は60%以上に男女不明との回答が得られた。男性発話の場合、A4・A24は90%以上に、A3・A10は80%以上、A23は70%以上、A9及びA25は60%以上、そしてA11は50%以上の被験者に男女不明として判断された。

要するに、18の女性発話のうち9つが70%以上の被験者によって正しく判断されたのに対し、12の男性発話のうち70%以上で正しく判断されたものは3つに過ぎない。これらの結果から2つの結論を導くことができる：

結論①小説において女性の登場人物の方がマーカーの使用が多く、男性の登場人物の発話より判断しやすい。

ただし逆にマーカーの少ない発話は必ずしも男性発話と判断されず、被験者が迷ったのである。それは：

結論②女性がこのようなマーカーの少ないことばづかいをすることが容認されつつあること、を示す。

そのため、マーカーが少ない発話において発話者の性を判断することが困難となる。一方、女性性を表すマーカーの方が標識が強いため女性発話をそのように判断することがより容易となるのであろう。換言すれば、文脈の支えがない場合でも、女性発話を見分けることはより容易である。

また、次のようにも考えられる。男性のことばづかいがもともとマーカーが少ないとすれば、「女性のことばづかい」が「男性のことばづかい+ α 」だといえるかもしれない。このことと、若者の男女のことばが接近しつつあることを両方考慮すれば、マーカーの少ない発話、または無標の発話からその発話者の性を判断することが困難であるのは当然であろう。日本語を母語としない筆者にとって、男性が使用する日本語は「はだかの言語」により近く、女性はそれに何かを加えることが多いようにみえる。要するに、辞書の見出し語が基本の形だとすれば、男性がそれを用い、女性はその形を変えたり、何かを飾ったりすることをする。例えば、

- ① 動詞の場合：女性は、敬意の度合いはどうかで、動詞のデス・マス形をより多く使用し、それに対し男性は動詞の基本の形ダ・ル形を用いる(井出1983)。
- ② 終助詞：女性は男性より組み合わせが多い(小泉1976)。
- ③ 接頭辞「お」、美化語：女性の方が多用する(井出1983)。

しかし、女性が以前は男性特有であった「はだかの言語」または「飾りの少ないことばづ

宜上発話を発話者の性に分けて並べ替えた。

かい] をすることが増加したため、文脈の支えがない限り、このような発話は読者にとって判断が困難となる⁸。

4.2 判断の根拠となった要素は何か？

女性の発話である A20 は推測した通り判断しにくい文であった。被験者の 78 人が男女不明と判断した。それは明白なマーカーがないからだといえる。このような明らかなマーカーのない文の場合、読者は文脈によって欠けている情報を補うと考える。例えば、会話のなかでターンテキングによって誰が話しているかなどがはっきりしている場合、あえてマーカーを追加しなくても読者にそのことが通じる。しかし、小説にはマーカーが重要な役割を果たす。読者は何をマーカーとして認識するか以下に考察する。

被験者の半数以上に正しく女性発話・男性発話と判断された発話において被験者にとって判断の根拠となった要素を表 2 にまとめる。

表 2：判断の根拠となった要素（男女不明と判断された発話を除外）

	女性発話	男性発話
終助詞	「ぞ」	A7
	「かな」	A28
	「よ」	A1
	「ね」	A12、A22
	「の」	A2、A14、A19
動詞：丁寧な表現	「お～になって」	A8、A16
	「らして」	A16
動詞：命令表現	「ちょうだい」	A21、A27
	「なさい」	A29
動詞：断言	「(ん) だ」	A26

1) 終助詞

終助詞の場合、結果は他の研究の結論に違背していない。例えば、筆者が 1996 年に行った調査の結果 (Vanbaelen 1997)、「よ」はやや男性的、「よね」はやや女性的と判断された。つまり、「よ」実体は男女両方に使用される。「ぞ」が非常に男性的、そして「かしら」が非常に女性的と判断された。「かしら」とほぼ同じ機能を果たす「かな」は当時でも中立的で男女両方に使用される終助詞であると判断された。

a. 「ぞ」：A7

「ぞ」は未だに男性性の強い終助詞である。本調査では、もともと「ぞ」に対する被験者の反応を調べるために項目として選択したわけではない。「んじゃない」という否定の命令（禁止）がどう判断されるか回答を期待したのだが、やはり「ぞ」はまだ男性特有の終助

⁸ 例外は接頭辞の「お」であるかもしれない。「お」がつく名詞が定着し「女性語」というレッテルが薄くなりつつある現在、男性の使用も増加し、「飾りの多いことばづかい」であるにもかかわらず、必ずし

詞としてのイメージが強いため被験者の判断は「ぞ」に基づいたものとなったといえる。

b. 「かな」A28：A17と合わせて考えることにする。上記のように「かしら」は未だに女性特有の終助詞として考えられるため今回の調査では扱わなかった。一方、かなり中立化した「かな」は2つの発話に含まれており、それぞれ1つは女性の発話（A17）、1つは男性のもの（A28）である。A17は接頭辞の「お」を含むため女性発話として判断されると予測したにも関わらず、男女不明の発話とされた。A28は回答がほぼ半々に分かれる（男性発話44人、男女不明39人）ものの、男性の発話とされた。したがって、書きことばにおいて「かな」のイメージはわずかながら男性性の強いものに傾いているといえる。

c. 「よ」A1、A29：A1の場合、回答は「よ」に一致している。A29の場合、「よ」の他に様々な要素が判断に影響を及ぼしているといえる：

回答不要： 女性：15人(26.3%) 男性：6人(22.2%)

無回答： 女性：4人(7%) 男性：4人(14.8%)

「よ」： 女性：27人(47.4%) 男性：10人(37%)

「なさい」：女性：13人(22.8%) 男性：5人(18.5%)

内容： 女性：6人(10.5%) 男性：5人(18.5%)⁹

「よ」を判断の根拠として挙げる被験者が圧倒的だったが、おそらく「なさい」と「内容」という他の要素がその選択に影響している。特に「なさい」というのは命令表現の1つとして女性より男性に使用される。それは「ください」や「ちょうだい」のような命令表現より「なさい」の丁寧度がより低く男性により使用やすいと考えられるからだ。さらに「よ」といっても、「よ」の前にある「考えなくてはいけない」という動詞の形と一緒に下線した被験者も少なくない。これはかなりの断言的な表現で男性に好まれる。

d. 「ね」：A12：74人の被験者にとって「ね」は判断において重要な要素であった。54人の場合、「ね」のみが、そして20人の場合、「泊めてあげてね」に下線が引かれたのである。つまり、動詞が影響を及ぼしているといえる。小泉(1976)によると命令・依頼を表す「動詞の連用形＋て＋終助詞」は女性特有の言い方である。男性にまったく使用されないとは言いきれないまでも、他の命令表現より言い方がかなり婉曲的で丁寧である。このような間接的な話し方が女性の特徴であるため（上記のTakano 2000の引用を参照）女性発話と判断された可能性が高い。

A22：この発話をA3と組み合わせて考察する。A3は男性発話で、A22は女性発話である。唯一の違いはA22に「だ」がないのみである。A22はほぼ全員（82人）に正しく女性発話と判断された。これは女性が形容動詞の場合「だ」をあまり使用しないという先行研究の結果と一致する。しかし、A3は被験者にとって判断しにくく、72人から男女不明という回答が得られた。要するに、「だ」がない発話は明らかに女性の領域であるが、「だ」

も女性の発話であるとはいえなくなってきたと考える。以下により深く考察する。

⁹ 複数回答可能。なお、括弧内のパーセンテージは両グループとの比較を可能にするため男女別のものである。「回答不要」；「男女不明」を選択した場合、根拠となる要素がないと考え下線を求めなかった。

があっても男女とも使用していると被験者は考えている。後者はもともと男性のことばづかいの領域だったが書きことばでも女性の使用が容認されることを示す。これは若者のことばづかいにおける中立化の証拠となる1つであるかもしれない。

e. 「の」: A2、A14、A19

先行研究は「の」の男女差が小さくなっていると指摘しているが被験者にとって女性発話のマーカ―としての意識が強い。A2及びA14は被験者の80%以上に正しく判断され、その根拠となったのは圧倒的に「(な)の」¹⁰である。A19は意見がほぼ半々に分かれ、「男女不明」より「女性発話」という回答がやや多い¹¹。おそらく「な+の」の組み合わせが文章に「女性」のイメージを与え、やや強い言い方である「待ちなさい」(A2)が含まれていても被験者は迷わず女性の発話だと判断した。

2) 動詞

a. 丁寧な表現: 「お~になって」、「らして」: A8、A16

A8・A16は形の上は、命令表現の一種であるもののその意味が薄い。意味の上では、誘いの丁寧な言い回しである。さらに発話は両方とも不完全な文末表現である。これらはすべて女性語特有な要素で、女性性が高く、被験者にとって判断しやすい発話であると予測した。予測通り、A8が77%、A16が100%の被験者に正しく判断された。判断の根拠となった語句を便宜上、「お~になって」「らして」にまとめたが、下線が引かれた語句は「なつて」「お~なつて」「お~になつて」「になつて」「お+連用形」など様々であった。そのため、被験者が丁寧の表現に基づいて発話を判断したのか不完全な文末表現に基づいて判断したのか一概にいけない。

b. 断言を表す表現: 「(ん)だ」: A26; 男女不明と判断されたA5、A9及びA25と共に以下の4.3節に分析する。

c. 命令表現: 「ちようだい」(A21、A27) および「なさい」(A29)を男女不明と判断された発話(A6、A13、A15、A23、A24)と共に以下の4.3節に分析する。

4.3 男女不明の発話

発話に男性語・女性語特有なマーカ―と予測した語句を含んでいるにもかかわらず、男女の区別が困難である場合も考えられる。それは予測されたマーカ―が過渡期にあるか、男女ともに利用できるようになっているか、理由はいくつか考えられる。なお、このようなマーカ―は女性性・男性性の度合いが低いともいえる。

1) 終助詞「ね」: A18

この発話は女性発話で、マーカ―と思われるものは「ね」の他、「大丈夫かもしれないね」と「どこかにつとめても」という2つの語句の倒置である。しかし、倒置は不完全な文末

¹⁰ A2: 「の」: 10人、「なの」: 51人、「なさい」: 18人 A14: 「の」: 7人、「なの」 57人

¹¹ A19: 「女性発話」と回答した被験者の36人は「の」を根拠として挙げている。

表現と同様質問紙調査法で調査しにくいようである。なお、「ね」のみでは性を判定する情報は不十分であった。その上、他に「ね」を含む発話 (A3、A12、A22、A27、A29) の結果を考察すると、「ね」はマーカーとしてかなり弱いといえる。つまり、A3 以外の発話が 70%以上の被験者に正しく判断されているにもかかわらず、判断の根拠となる語句は「ね」ではなく、発話の他の要素にあった。

2) 動詞

a. 命令表現：A6、A13、A15、A23、A24：A21、A27 の「ちょうだい」は半数以上の被験者に女性発話として判断された。「なさい」を含む A29 は男性発話として判断されたが他の要素も含まれているため単に「なさい」で判断されたと言い切れない（「なさい」が判断の根拠となった要素だったのは男女共に 20%にとどまる）。

A6、A23 は両方とも「なさい」を含む発話である。「なさい」は「ちょうだい」より直接的であるため男性発話と判断されると推測したのだが、A29 と同様に明白な判断は与えられなかった。A6 と A23 に影響しているのは内容だと考える。A6 は仕付け、A23 はケーキと台所の話で両方とも未だに女性の領域にあるテーマだといえる。そのため、やや断言的な表現でも女性発話と思わせるわけである。特に A23 はそのような印象を与えたようである。なぜかという、男女不明以外の判断をした被験者は 19 人、その中 15 人が女性発話と判断したが実際は男性の発話である。

A13、A15 は不完全な文末表現を含む発話である。不完全な文末表現は上記の Takano (2000)が触れる indirectness（「間接性」、断言を避けること）を表す方法の 1 つとして捉えることができる。しかし、不完全な文末表現が女性のことばづかいの特徴であるということについて研究者の意見は一致していない。例えば、堀井(1989)は女性が多く使うと指摘するにもかかわらず遠藤(1992)による研究データは少なくとも働く女性と男性の間にほとんど差がないことを示す。先行研究の結果が一致していないことから一般の日本語話者の間でもこの現象がそれほど目立たないことが考えられる。上で議論したように(接頭辞「お」の所)、不完全な発話は一般の人にとってそれほど女性発話として意識されないようである。男女不明以外の判断をした被験者は全員 (A13 の場合 9 人、A15 の場合 20 人) 女性発話を選択し、判断の根拠となった要素は動詞の「て形」及び「内容」ほぼ半々に分かれる。A24 の「ください」はやはり情報が少なく判断しにくいようであった。丁寧度もかなりニュートラルで男女共に使用できる表現なため、マーカーとして成り立たない。

b. 断言を表す表現：A5 (んだけど)、A9 (んだ)、A25 (だよ)：

『日本語教育事典』において「んだ」は「聞き手に対して、ある事柄が事実であることを強調したり、自己の判断を主張したりして納得させようとする含みを帯び、いわゆる説明形・説得形の表現に多く用いられる」とされ、さらに「断定的な判断を表す」という記述がある(1982:389)。間接的な表現が女性に望ましいとすれば(上記の井出(1983)や Smith(1992b)などを参照)、「んだ」はあまりふさわしくなく、男性性がより高い言い方だ

と考える。よって、「んだ」を含有する発話が男性発話と判断されることが予測された。結果的に A26 の場合、99%の被験者がその通りに判断した。しかし、「んだ」を含む A5、A9、そして「だ」を含む A25 が 70%前後に男女不明と判断された。したがって、断言的な言い方のみでは発話者の性を判断するために不十分である。

3) **接頭辞**「お」: A4、A11、A17、A30: 井出(1983: 181-2)は 15 年も前に接頭辞の「お」について以下のように記述している。

「敬語の接頭辞「お」は元来、尊敬する相手に関することばにつけるものである」にもかかわらず「美化語」は「相手や場面に対する気遣いから生まれたものではない。ただフォーマリティーの高いことばを使い、美しく表現するだけである。(省略) お化粧は女性だけがするものであるように、ことばのお化粧である美化語の使用も女に限られている、と一応いうことができる。」

女性のみでの使用ではなくなったこと、さらにお化粧の意識も薄くなったことに注目したい。A17 は既に上に分析した。要するに、「お」が含まれているにもかかわらず、「かな」の影響によって女性の発話と判断しにくいのである。さらに、A30 は女性のことばづかいの特徴であるといわれてきた不完全な文末表現である。それにもかかわらず、そして「お」が含まれていても、女性発話という判断は困難であった。この 2 例から、そして A11 の「お詫び」も同様であろうが、名詞によって「お」の付加が定着しており、男性に使用されてもおかしくない状態となっているといえる。

その上になおかつ、A30 は不完全な発話が必ずしも女性特有の使い方として親しみがないうことを示唆する。要するに、研究上男女間の差異が明白になるかもしれないが一般の人々にははっきりしているマーカーではないということである。A4 は慣用語であり、特定の場面(例えばレストランのウェ이터・ウェイトレス)に使用されるため、接頭辞「お」も動詞の丁寧体も女性の発話を指し示す機能を失うといえる。

5. まとめ

本論文では小説中にどのような語句が「性差マーカー」の働きをするのか調査し分析を行った。話しことばにおける男女差に関する先行研究に基づいて調査項目を選択した。話しことばと書きことば(ここでは小説における会話)には根本的な差異は現れないと思ったからである。つまり、書き手が読み手に発話者の性を伝えるために話しことばとほぼ同じようなマーカーを使用している上、読み手も同じ共有知識に基づいて同じマーカーを期待する。予測通り被験者が下線を引いた語句は調査項目として選んだものとはほぼ一致していた。

男性性・女性性がより高いマーカーを含有する発話は発話者の性を判定するのに容易であると予測できるが結果的に特に女性発話にそのような傾向がみられた。つまり、発話者が女性であることを示すマーカーが小説により多く使用され、判定がより簡単であった。

マーカの少ない発話が男性の発話であると簡単に断言できないのは女性にもそのようなことばづかいが容認されつつあるということを示す。

マーカの男性性・女性性の度合いは組み合わせやその発話の内容などによって異なる。例えば本調査で扱った終助詞「よ」というマーカがある発話に女性の「性差マーカ」の役割を果たしているにもかかわらず、他の発話に男性の「性差マーカ」として働いている。さらに場合によって、同じマーカが発話者の性を判定するのに不十分であることも考えられる（例：終助詞「ね」や命令表現）。このようなケースでは、不十分な情報を文脈で補わない限り読み手は混乱してしまうといえる。結局揺れがみられなかったマーカは男性発話を示す「ぞ」、女性発話を示す「の」、動詞の丁寧な表現および命令形の「ちょうだい」である。その他のマーカはそのマーカのみでは読み手に十分な情報を与えていないといえる。

6. 今後の課題

課題が残されているのは不完全な文末表現であろう。例えば、被験者が不完全な文末表現という文法的な要素を性特有のマーカとして意識しているのか質問紙調査上把握しにくいのである。さらに、不完全な文末表現と丁寧な言い回しが重なる場合、被験者は何を根拠にして発話を判断したか明白ではない。このようなものをフォロー・アップインタビューではっきりさせるべきであろう。

不完全な文末表現と同様に倒置を質問紙調査法で調査するため質問紙を工夫せざるを得ない。それは語句に下線を引いてもらうだけでは分からないからである。さらに、言語学に無縁な一般人にとって、終助詞や人称代名詞などのような男女差がはっきりしているものを「性差マーカ」として認識していても、倒置や不完全な文末表現のような使い手のストラテジーともいえる概念を把握できる可能性は低いと思われる。これらのストラテジーが「性差マーカ」としてどの程度有効であるかもっと調べる必要がある。

【資料】

江國香織(1999)『流しのしたの骨』新潮文庫

【参考文献】

- Shibamoto, J.S. (1985) *Japanese Women's Language*. New York: Academic Press
- Shibamoto, J.S. (1990) Sex-related variation in the ellipsis of wa and ga. In Ide, S. & McGloin, N.H. (eds.) *Aspects of Japanese Women's Language*. Tokyo: Kuroshio, 81-104
- Smith, J.S. (1992a) Linguistic privilege: "Just stating the facts" in Japanese. In Hall, K. & Bucholtz, M. & Moonwomon, B. (eds.) *Locating Power: Proceedings of the Second Berkeley Women and language Conference*. Berkeley: Berkeley Women and Language Group, 540-54
- Smith, J.S. (1992b) Women in charge: politeness and directives in the speech of Japanese women.

Language in Society, 21, 59-82.

- Takano, S. (2000) The myth of a homogeneous speech community: a sociolinguistics study of the speech of Japanese women in diverse gender roles. *International Journal of Society in Language*, 146, 43-85
- Vanbaelen, R. (1997) 「男性同性愛者のことばづかい—一般の男性、及び女性との比較—」『筑波応用言語学研究』4号、167-180.
- 浅田浩文(1998)「第二言語としての日本語の男言葉、女言葉—男女差を示す文末表現においての日本語学習者の産出、受容能力—」『日本語教育』96号、25-36
- 井出祥子(1983)「女らしさの言語学—なぜ女は女性語を使うのか—」『講座日本語の表現3話しことばの表現』筑摩書房、174-193
- 遠藤織枝(1991)「ことばと女性」『解釈と鑑賞』722、28-37
- 遠藤織枝(1992)「男と女の話しことば：日本語教育と性差検証の視点から」『ことば』13、61-88
- 小川早百合(1997)「現代の若者会話における文末表現の男女差」『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』凡人社、205-220
- 金水敏(2000)「役割語探求の提案」『国語史の新視点』明治書院
- 小泉保(1976)「女性のことば」『月刊言語』5-5、60-69
- 日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』大修館書店
- 野田春美(1997)「『のだ』の機能」(Frontier Series 日本語研究叢書9) くろしお出版
- 堀井令以知(1989)「男性のことば、女性のことば」『講座日本語と日本語教育』東京：明治書院
- 堀井令以知(1990)「女のことば」明治書院
- メイナード・K・泉子(1993)『会話分析』くろしお出版

【付録資料：質問紙調査の第1部】

A. 以下の文を読み、その文の発話者が女性なのか男性なのか答えてください。はっきりしない場合、男女不明と答えてください。女性または男性と答えた場合、文のどこでそう判断したか、判断の根拠となった部分に下線を引いてください。判断の根拠が特定の箇所ではなく、発話の内容で判断した場合は「内容」に下線を引いてください。

例：★「どうぞどうぞ、おすわりください」

男・女・男女不明 内容

★「かわいい靴！」

男・女・男女不明 内容

1. 「たいした用じゃない用ってなによ」
2. 「ちょっとまちなさい」「説明もなしなの？」
3. 「器用だね」

4. 「お連れさまはもうおみえです」
5. 「そよちゃんに電話をかけようと思うんだけど」
6. 「こと子、鼻をふくらませて歩くのはやめなさい」
7. 「あまり悲しむんじゃないぞ」
8. 「さあどうぞおすわりになって」
9. 「調べたんだ」「ことちゃんと同じ年の国」
10. 「あ、そうだ」「できたよ、あのジグソーパズル」
11. 「おごるよ、お詫びに」
12. 「今夜はあなたの部屋に泊めてあげてね」
13. 「ちょっと待ってて」
14. 「もうすぐ試験なの」「こと子はいいなあ、極楽の暮らしで」
15. 「ドアを閉めて！」
16. 「どうぞお入りになって」「そよも向こうにおりますから」「お茶だけでもあがってらして」
17. 「お風呂に入ってこようかな」
18. 「こと子は案内まじめなどがあるから、大丈夫かもしれないね、どこかにつとめても」
19. 「言わなかったの？しま子夕べ」
20. 「気持ちいい」
21. 「どうもありがとう。洋服は椅子の上に置いてちょうだい」
22. 「器用ね」
23. 「和室に精養軒のマドレーヌがあるから、もしよかったら食べなさい」
24. 「どうぞどうぞ、おすわりください」
25. 「毒だよ、そんなに泣いちゃ」
26. 「さっきから気になっていたんだが、それはなんのまねなんだ」
27. 「じゃあこれを読んでちょうだい。歯切れよくね。しおりのところから」
28. 「もう一度、言ってみてくれるかな」
29. 「まあちょっと待ちなさい」「こういうことはよく考えてみなくてはいけないよ。落ち着いて、じっくりとね」
30. 「お茶をいれようと思って」